

研究の考察【歴史的分野】の実践から

考察の視点

社会的な問題を把握する段階に焦点を当て、社会的な問題を明解にする手立てを取り入れた研究をしてきました。この手立ての有効性について、以下のアからウの3点を視点に考察します。【歴史的分野】においては、小学校での実践を基に考察します。

本研究の考察の視点

- ア 切実感をもって討論に参加するようになったかどうか
- イ 社会的な問題に対する自分の考えを深めることになったかどうか
- ウ 説明したり、論述したりする力を育成することになったかどうか

なお、考察のために抽出した児童の記述については、ワークシートの記述を直接引用しています。

ア 「切実感をもって討論に参加するようになったかどうか」についての考察

切実感をもって討論に参加するようになったかどうかを、実践事例5の小学校第6学年「明治の国づくりを進めた人々」その1を基に考察します。本時の授業では、明治政府の諸政策について、「明治政府は国家の発展を優先した政策を行ったこと」から「国家の発展」と「国民の安定した生活」のどちらを優先すべきだったかについての1回目の意思決定(本時)を迫りました。

まず、本時のワークシートの記述内容から切実感をもつことができたかどうかを学級全体で考察します。次に、その内訳において、合意や打開に向けた考えを付加していたX児と、意思決定をしているが判断に悩んでいることを記述していたY児を抽出して、考察を加えます。なお、切実感をもつことができたかどうかは、次の3点をめやすとして判断します。

- ・ 合意や打開に向けた考えを付加している
- ・ 意思決定をしているが判断に悩んでいる記述がある
- ・ もっと調べたいことや疑問に思ったことの記述がある

【学級全体の様子】

学級全体の記述の様子を、上記の3点のめやすを基に図1のように整理しました。合意や打開に向けた考えを付加したり、意思決定に悩んだことやもっと調べたいことを記述したりした児童の合計約73%(22名)が社会的な問題に対して切実感をもったと判断します。これは、社会的な問題を明解にし、意思決定を迫ったことにより、何とかして両立できないかと模索している姿や情報が足りずに決めかねている姿だと考えます。つまり、児童の新しい課題や疑問が生じ学習を続ける意欲へと結び付けている姿だと考えます。

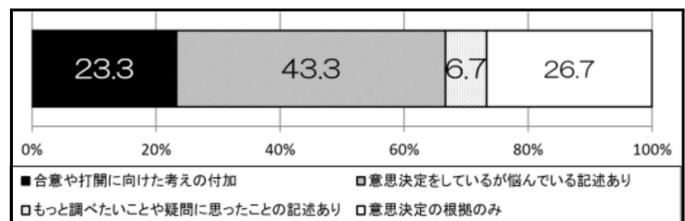


図1 本時の振り返りの記述の内訳 n=30

※複数の記述が見られた児童は1つの記述だけをカウントしている。

【打開に向けた考えを付加したX児】

資料1の□部のようにX児は、「政府は、国民のことを考えた政策をすること、国民も国民のことを考える必要がある」という合意や打開に向けた考えを付加しています。これは、「国

学制や産業興業など、そのような政策が必要ならば日本は力が強い国にもなれる。国家と国民の意見が合えば、国としてより強くなる。働かなくても命が大切。国民は、その政策に対して不満ばかりだし、それなら、その政策のおかげで今の日本がある。だから国家の方が大切。政府も国民のことを考えて政策し、国民も政府(国)のことを考える。政府は国民と国民は国を大切にすることが大切。

資料1 X児の記述(合意や打開に向けた考えの記述)

家の発展」と「国民の安定した生活」とで優先すべき判断が分かれてしまうという問題を把握することができている姿だと考えます。さらに、何とかしてこの問題を解決したいという課題意識をもっていると考えます。

このことから、X児は社会的な問題に対しての切実感をもったと判断します。

【決めきれないことを表現したY児】

資料2の波線部のようにY児は、国民の生活を優先すべきと考えています。しかし、「どちらもよくてどちらも悪くないから決めきれませんでした。」という記述をしています。これは、「国家の発展」と「国民の安定した生活」とで優先すべき判断が分かれてしまうという問題を把握することができている姿だと考えます。また、どちらにも社会的な価値があることに気付いており、当事者意識をもって深く考えたことから自分が下した判断が揺らぎ悩んでいると考えます。

私は国民の安定した生活を大切にしたい方がよかったと思います。理由は日本に住む人がいなければ日本がある意味が無いです。国民が安定した生活をして国家がよくなっていけばいいと思います。

国家がよくなる事いいと思います。外国に負けないう国をつくるためにしている事なのでいいと思います。

なので私は両方良くていたらよかったと思います。理由はどちらもいいと思うし、どちらも悪くはないと思うからです。決めきれませんでした。...

資料2 Y児の記述

(意思決定はしているが、悩んでいる記述)

このことから、Y児も社会的な問題に対しての切実感をもったと判断します。

討論に参加する意欲について単元に入る前(7月)と討論後(9月)に取った意識調査を基に考察します。

社会科の授業で自分の考えを発言できるか(できたか)を問うた答えを見てみると、単元に入る前に取った意識調査では、図2のように、約81%(26名)の児童が発言が「できない」、「あまりできない」と答えていました。しかし、本単元を終えた討論後に取った意識調査では、図3のように、80%(24名)の児童が、「できる(できた)」、「どちらかといえばできる(どちらかといえばできた)」と答えています。

このことから、児童は本単元において、発言することができたと感じるようになっていくことがうかがえます。これは、児童が自分の考えを発言することに対して自信をもつようになった姿だと考えます。

また、図3において、「できる」、「どちらかといえばできる」と答えた理由を追調査したところ、「自分が言いたいことが言えたから」や「言い方が分かったから」、「答えを自分で考えられたから」など、自分の考えを表出できたことを述べています。さらに、「友達が自分の考えをよく聞いてくれた」と友達に認めてもらえたことを述べている児童もいました。

以上のことから、児童は本単元を通して、積極的に発言しようとする意識が高まり、切実感をもって討論に参加することができたと考えます。これにより、社会的な問題を明解にする手立てが、切実感をもって討論に参加するようになることに有効であると考えます。

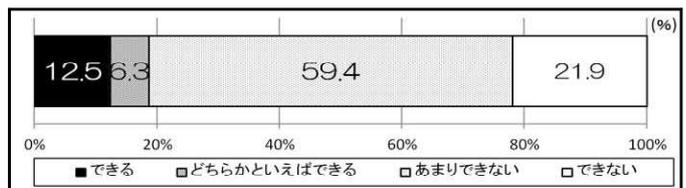


図2 社会科における発言についての意識調査(7月) n=32

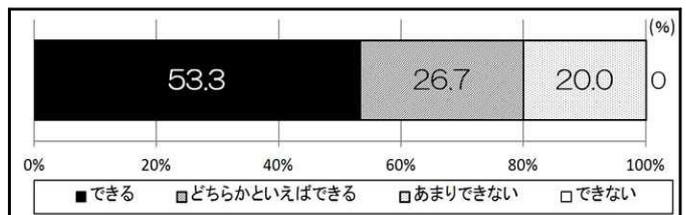


図3 社会科における発言についての意識調査(9月) n=30

イ 「社会的な問題に対する自分の考えを深めることになったかどうか」についての考察

考えが深まったかどうかについて、実践事例7の小学校第6学年「新しい国づくりは、どう進められたの」を基にワークシートの記述を基に学級全体で考察します。また、具体的な考えの深まりについて抽出児B児とE児のワークシートの記述を基に考察を加えます。なお、考えが深まったかどうかは、次の2点をめやすとして判断します。

- ・ 複数の立場を考慮している
- ・ 考えの根拠が明らかになっている

【考察に関わる単元の概要】

まず、学習問題Ⅰ「大政奉還後、日本の政治や人々の暮らしはどのように変わっていくのだろう」を基に、明治から大正期における内容について教科書を使って学習しました。次に、学習問題Ⅰのまとめとして、明治政府の諸政策についてのよい点(メリット)を整理させ、「意思決定を中心にした学習」に入りました。その際、これまでの学習で分かったこと、考えたことを記述させています(前時)。その後、社会的な問題を把握する段階において、本研究の手立てを基に明治政府の諸政策についての問題点(デメリット)と比較させ、学習問題Ⅱ「明治政府は国の利益と国民の生活のどちらを優先すべきだったのだろう」を導き出しました。この後、対立した立場のうちどちらを大切にするのかを問い、児童に1回目の意思決定とその理由を記述させています(本時)。さらに、学習問題Ⅱを論題にした討論型の学習を行い、2回目の意思決定とその理由を記述させました(討論後)。最後に、単元を振り返って考えたことを記述させています(単元の振り返り)。

【学級全体の様子】

児童が記述した前時、本時、討論後のワークシートの記述内容を、学級全体の様子として図4、図5、図6のように整理しました。上記の2つのめやすを基に、ワークシートの「記述に含まれる立場」を考慮している立場、意思決定の理由として「根拠にしているデータや理由付け」を明らかになった根拠であると捉え、判断しています。その上で、前時の記述内容の分布を図4、本時の記述内容の分布を図5、討論後の記述内容の分布を図6として、横軸に考慮されている立場の数、縦軸に考えの根拠として記述されているデータや理由付けの数を据え、各児童を○及び抽出児A、B、Eでプロットしています。

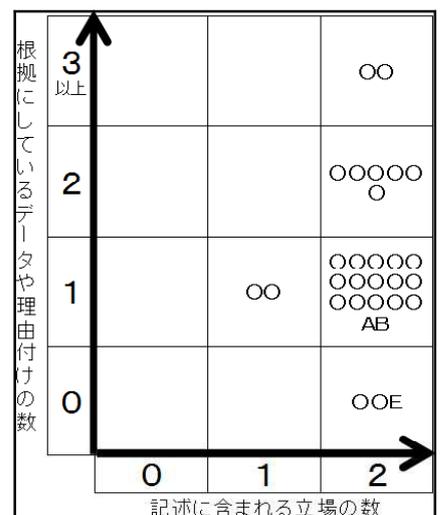
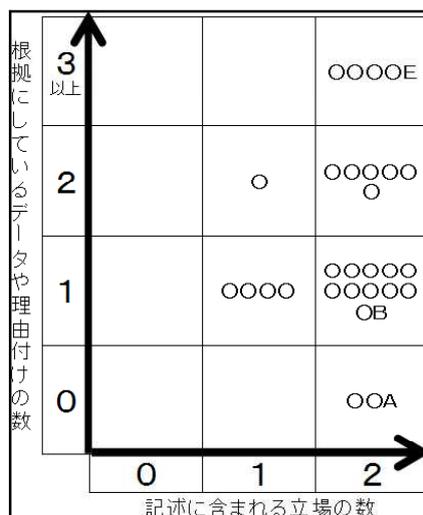
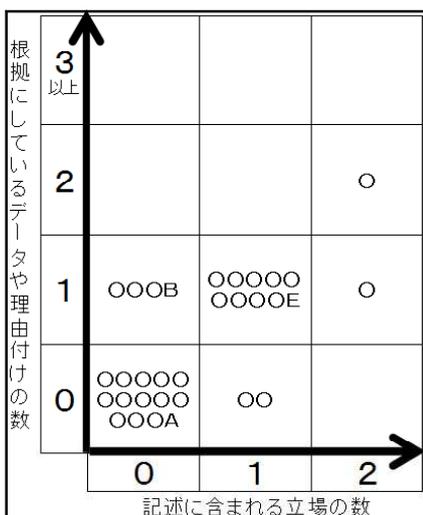


図4 前時の記述内容の分布 n=32 図5 本時の記述内容の分布 n=31 図6 討論後の記述内容の分布 n=30

- ※ 記述に含まれる立場の数は、自分の考えのみ…0、国家(政府)の立場または、国民の立場…1、両方…2
- ※ データの数とは、歴史的な事象やよい点や問題点として挙げた事柄の数
- ※ 理由付けとは、自分の考えを述べるために、自分なりに理由を付けて述べている数(データが含まれない理由の数)

図4と図5を比較すると、本時において、2つの立場から振り返りを記述することができた児童が、前時の約6%(2名)から約84%(26名)になっています。これは、社会的な問題を把握し、対立点を明確に捉えた姿だと考えます。中でも、74%(23名)が根拠の数も1つ以上挙げられていることから、立場を比較した多面的な思考ができてきていると考えます。つまり、考えが深まってきたと判断します。立場が1つしか書けなかった児童も、1つ以上の根拠を基に自分の考えを記述することができています。これは、対比については述べられなくても、意思決定をすることはできたと捉えています。さらに、図6と比較すると、討論後に約94%(28名)の児童が2つの立場から記述することができました。

【多面的な見方ができるようになり、判断の難しさに気付いたB児】

B児は、前時において、明治政府の諸政策のよい点について調べた際、資料3のように振り返っています。明治政府の諸政策が条約の改正につながったことや現在から約100年前に現在の制度の基ができていることに驚いています。このことから、明治政府の政策の目的や現在とのつながりなど1つ1つの政策を総合的に考えようとしている様子が見えます。しかし、よい点を調べた段階では、現在の自分から明治時代の政治に対する感想を述べているに過ぎず、一面的な考えであったと考えます。

○学習のふりかえり
 明治政治がやた事業政策は今にばかり
 条約の改正にもつながたりすいと思ひました。
 今から百年も前から今の制度のもとたり今の学
 校なども出来るとはおもしろいと思ひます。

資料3 B児の前時の振り返りの記述

社会的な問題を把握する段階において、「国民の安定した生活」と「国家の発展」との対立が明らかになった本時では、資料4のように振り返っています。国の発展を優先すべきとする根拠として、日清・日露戦争に勝利し賠償金を手に入れたことや(日本が外国を)支配したことを挙げています。これは、明治政府の富国強兵策による成果をよい点と捉え、国民の生活について、苦しくなったことに触れながら比較して判断していると考えられます。このことから、国家と国民という2面から明治政府の政策を見始めていることが分かります。しかし、国家の発展が軍事的なものであったり、国民の生活と比較した根拠が曖昧であったりして、国の発展を支持した根拠として論理的に関連付けるまでには至っていないと考えます。

私は国の発展をゆう先すべきだと思ひます。
 なぜなら、日清戦争や日露戦争に勝ち、
 たくさんのお金を手に入れたり、支配をした
 出来たし、国民の生活は苦しくな
 けど許可なしの旅行や娯楽を楽しん
 だり出来るのは明治政治ががんばったから
 これから、国が発展するべきだと思ひたから。

資料4 B児の本時の振り返りの記述

討論後、B児は、資料5のように、「やっぱり」という言葉を付け、国の発展を支持しています。しかし、根拠として、自由さ、便利さと生活の苦しさで「国の発展」と「国民の生活」を比較している記述が見られます。さらに、資料6のように比較する難しさや完璧な政治はないことに気付いた振り返りを述べています。

最終的な自分の考えは・・・
 私はやっぱり国の発展を優先すべきだと思ひます。国民が自由な職についたり便利な世になたりしたり出来る所と生活は苦くなるけど自分達が楽なものも国の発展だから

資料5 B児の討論後の振り返りの記述

○明治時代の学習を自分の言葉でふりかえろう
 二つの考えを比べてみたけどとても難しかったしどちらも必要だと思ひたい。おもしろい政治はないのでおもしろくないです。

資料6 B児の単元の振り返りの記述

このようにB児は、社会的な問題に出会い、討論、意思決定をする活動を通して、学習内容を関連付け、理解を深めていることがうかがえます。また、判断が分かれた社会的な問題について、多面的な見方ができるようになり、葛藤しながら自分の考えを深めることができたと考えます。

A児は前時において、資料11のように、明治政府の政策についてのよい点について調べ、まとめた際に、現在の自分たちの生活に結び付いていることに気づき、驚いたことを記述しています。明治時代と現代との結び付きに気付いています。しかし、分かったことが具体的に記述できておらず、考えたことが表現できていませんでした。このことから、前時の段階では、学習内容である歴史的事象に対して現代の自分から客観的に感想を述べていると考えます。

学習のふりかえり
この時代で今の文化やあるものはほとんどできていたんですけど、びっくりしました。これからはいろいろなものは、(人)格と、いいな〜と思います。

資料11 A児の前時の振り返りの記述

社会的な問題を明解にする手立てを取り入れた本時の後には、資料12のように、「国民の生活を優先した方がよい」という結論を挙げています。理由の中で、国(の政治)とは政府だけではやっていけないと思うからという理由付けを行っています。このことから、本時を経て、政府と国民との対立が明確に理解できており、政府と国民の両面から考えていることがうかがえます。しかし、根拠となる理由付けが抽象的なことから、言いたいことはあるが、具体的に表現できる言葉が見付からなかったことが推測されます。

学習のふりかえり
ほくは国民の生活をゆうせんしたほうがいいと思います。政府のほくをゆうせんしたらまたどこか、いきがおきるかもしれないし、国民のよもちゃんと考えて何かをしたほうが、いろいろなことが成奉すると思うから。他にも、国とは政府だけでは、だていけないと思うから。

資料12 A児の本時の振り返りの記述

さらに、討論後の記述では、資料13のように、国の発展を優先すべきと主張を変え、国が発展してきたから現在の生活が便利になり、生活が安定していることを根拠にしています。また、単元全体を振り返り、「今の日本がどう変わるかを決める時代のようだった」と述べています。これは、明治時代の歴史的事象を関連させ、明治時代の印象を総合的に述べることができていると考えます。

最終的な自分の考えは・・・
国の発展をゆう先したほうがいいと思います。なぜなら、今でも、国の発展で便利な物がふえたりで、国民の生活も安定しているから。
○明治時代の学習を自分の言葉でふりかえろう
明治時ではまさに、今の日本がどう変わるかを決める時代のようでした。

資料13 A児の討論後の振り返りの記述と単元の振り返りの記述

これらのことから、A児は、意思決定を取り入れた討論型の授業の中で、国民と政府、現在と明治時代など、多面的、総合的に考え、自分の考えを表現していることがうかがえます。また、抽象的であった表現も、便利さや生活の安定といった具体的な根拠を示しながら表現できてきたことが分かります。つまり、説明したり、論述したりする力が育ってきていると考えます。

以上のア、イ、ウから、「意思決定を取り入れた討論型の学習」において、社会的な問題を明解にする手立てを取り入れることにより、児童生徒が切実感をもって討論に参加するようになり、社会的な問題に対しての自分の考えを深め、説明したり、論述したりする力を育成することに有効であると考えます。このことから、「意思決定を取り入れた討論型の学習」の単元構想及び指導法が社会科の【歴史的分野】における思考力・判断力・表現力を育成する授業として有効であると考えます。